

「一流になりなさい。それには、一流だと思ひ込むことだ」という本からです  
**確信のあること。世のためになること。仲間が元気になること。**

「自分にしかできないことは何か？それが自分の使命だ。それを見つけたら、そのことに生命がけで取り組みなさい」

船井幸雄は、自らの使命に生命がけで取り組む尊さを、真剣に私たちに説くようになりました。間もなく 70 歳を迎える頃からでした。

船井先生自らが、加速度をつけて世のため人のため、よりマクロの善の生き方を追求していると感じていました。この世界を、未来の子供たちに正しく、美しく手渡すために、いま何をすべきか。ずいぶん前から、先生は生命がけでその一点に取り組んでいたと思います。「確信のもてることをする。そしてそれが世のため人のためになり、みんなが元気になることかどうか？何より自分が生命をかけられることかを考えて、やるべきことを見つけなさい」

研修会で全社員に語りかける船井先生自身が、確かにそのように生きていました。もちろん、常に言行一致の船井先生とすれば、当然のことでしょう。選択に迷った経営者に、先生は次のように答えるのが常でした。

「迷ったことはしないほうがいいですね。確信がもてて、成功をイメージ化できることを選んだらよいのですよ」

どんな相談ごとをもちかけられても、即座に答えを出せるのは、相手の話をじっくりと聞き、相談する相手にすでに答えを言わせているのだな、と思いました。とにかく、とことん話を聞くのです。そして、確信がない、自信がない、成功が想像もできない。そう語る相談相手に対する結論は、すでに決まっています。確信があることであれば、次に考えることはその選択が善なる選択であることかどうかです。次に、というよりそれがすべてです。

「損得よりも善悪で物事は判断するのです。善なることでなければ続かないのですよ」少々心違いしている経営者には、にこやかにそう諭すのです。新しいアイデアに興奮したり、大きな利益を想像してしまうと、そのことにすら気づかないものようです。世のため人のためになることをしなさい。若い経営者は、その言葉を素直に、そして正しく受け取る人が多いようです。

日本は豊かになり、一人ひとりが仕事の目的、そして人生、生きる目的を人間として心に抱きたいと思う世の中になりました。人間としての切実な願いと言ってもよいでしょう。貧しい時代であれば、働く目的は生きるため、食べるための一点にほかならなかったのです。船井先生の使命、役割は間違いなく日一日と大きくなっていくなど感じていました。「多くの人や、仲間が元気になることができればいいですね。何より、あなたが元気になることであれば、生命をかけて、仕事にのぞめるでしょう」

相談をしにきた人たちは、その言葉を聞いて笑顔で帰途につきます。「うん大丈夫だよ。あの方は成功するよ」

その人間にしかできない使命。そのことを確認できたときに、船井先生は晴れやかな笑顔でそう語ります。先生自身、船井幸雄にしかできないことに取り組んでいました。それは間違いなくより多くの人間が元気になること、船井先生自身がいっそう元気になることでもありました。

よりよい未来のために。その一点に生命をかけ、日々に打ち込んでいる船井先生が自分の創りあげた会社から身を引く日が、近づいていました。

選択に迷った経営者に、船井先生はどのように答えるのが常でしたか？

( )